

図書館だより

Bulletin of the Hokkai Gakuen University Library

滝(康太郎)

を越え登って行った 若き作曲家

明治44年、初夏の候。

東京、上野。

カッコウの鳴く深閑とした森^{うぐだに}を鶯谷方面から上野へ登って行く一人の青年。

彼はやがて、東京音楽学校の門をくぐり、奏楽堂にさしかかっていた。

その時、一人の若い教授が、彼を呼び止めた。

「龍太郎君、今晚また一杯やろう。例の上野下の居酒屋で、実は話があるんだ。しかも大急ぎの」

声をかけた主は、東京音楽学校教授、国語担当^{よしまるかずまき}の吉丸一昌と言った。

声をかけられた若い青年は、後の童謡運動を担った引田龍太郎。

この時、彼はまだ2年目の学生。19歳だった。

「空腹を満たせる」という想いと頼まれる作曲の詩を早く見たいという想いが頭をよぎっていた。

他方、吉丸一昌は大の酒好き、人と飲み論談風発を楽しみとした。

人の教育とは、教壇の中にあるのではなく、「胃袋」から始まるというのが信条だった。

それは、すでに東大を退官した漱石の考えにも通ずる。吉丸は漱石山脈の一人であったのだ。

カッコウ鳴く上野の森で 青年を呼びとめた少壮の国文学者

書彩声彩

童、夢みし

—「早春賦」と

その時代 ①

ももせ 百瀬の滝を登りなば

〽^{いらか} 麓の波と雲の波
重なる波の中空を
橘^{たちばな}かおる朝風に
高く泳ぐや

鯉のぼり

『尋常小学唱歌(五)
(大2・5)』

- p.2. ライブラリーシステム導入から一年 ■ p.3. 夏は本を狩り、雪の降る頃に読む ■ p.4. DNA 中にある「神の国」 ■ p.5. 『バビロニアの数学』の中の「ピュタゴラスの定理」 ■ p.6. 「早春賦」で解く唱歌ミステリー ■ p.7. 唱歌ライバル物語 ■ p.8. 「三国人」「神の国」そして乙武氏。

ライブラリースystem導入から一年

— 図書館電算事情 —

昨年12月からコンピュータシステムが導入され早くも半年が過ぎてた。この間、さまざまなハード、ソフトのトラブルを乗り越え現在に至っている。

それにしても図書館の仕事は電算によってずいぶん単純化されたかに見えるのだが、そうでもない。1冊の図書の入力情報はとても多く複雑であることだ。

*「プラトン」による会計処理

*「ライブビジョン」による各々の図書の情報管理

* 学術情報センターとのデータ通信

もちろん今までどおりの装備作業もある。

しかし、電算は素晴らしい。

各電算システムが有機的に関連して以前よりも迅速に利用者へサービスができるのだ。

* 手間のかかった図書の貸出・返却は一瞬にしてOK.

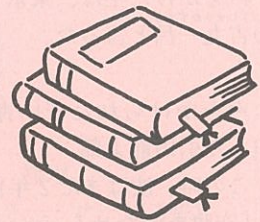
* 文献検索はOPACの画面に簡単な入力でもOK.

* インターネットで国内外の文献検索がOK.
(レファレンス・サービス係で対応)

しかし、まだ手放しでは喜べない。

わが図書館には、和書、洋書あわせて約70万冊の蔵書がある。すべての図書を電算に対応するには、相当な手間と時間を要する。この遡及入力を完了しすべての図書の検索がOPACで可能になった時こそ真の電算が実現したといえるのだ。図書館として今最大の課題である。それまでは、申し訳ないのだが検索は目録カードとの併用をお願いしたい。

最後に、天塩にかけた図書を無断で、手続なしに持ち去ることのないよう願わずにはいられない。



*PLATON=Progressive Library Acquisition management Tools On Network
: 紀伊国屋書店が開発した図書館予算管理システム

*Lib Vision: 日本IBM社の図書館情報管理システム

*文部省学術情報センター (NACSIS)=National Center for Science Information System
: 2000年4月1日に国立情報学研究所に改組

*OPAC=On-line Public Access Catalog: 公開検索 (本学図書館所蔵図書検索)

年 表

▶ 電算と図書館この1年 ▶

- 1999年 4月 電算導入委員会の開催
5月 業務組織再編でレファレンス係の開設
6月 開館時間延長
本 館 9:00~22:00 (月~土)
工学部図書室 9:00~20:00 (月~金)
9:00~15:00 (土)
紀伊国屋書店とシステム移行の討議
始まる
7月 電算設置のための工事始まる
3 F 事務室南側 (仮) 移動
2 F 北側レファレンス・サービス係
コーナー設置
紀伊国屋書店の電算業務の研修始まる
8月 3 F 事務室移動、事務室に電算設置
完了
10月 新業務体制発足
11月 貸出・返却業務電算システムへ移行
12月 受入業務電算システムに移行
2000年 3月 工学部図書室電算完了
4月 OPAC用PC5台設置(2F)、工学
部2台
PC(インターネット可)4台設置(3
F)
AVブース増設計11台設置(3F)

● 図書選書委員 ●

(○印は図書委員)

- 経済学部 ○伊藤友章先生
古林英一先生、小島康次先生
法 学 部 ○織田有基子先生
新山一範先生、横山純一先生
人文学部 ○徳永良次先生
須田一弘先生、宝利尚一先生
工 学 部 ○吉田文夫先生

夏には本を狩り 雪の降る頃に

それを読むべし

夏に本を読むのは難しい。

しかし、夏に本を狩ることは出来る。

こうして、本のアリになれば、雪が降ってから
楽しみがある。

雪が降ってから本を買い求めるのでは遅すぎる
だろう。

短 信

Many thanks

for compliment from

Lethbridge University

この4月、本学の入学式の際に来札したカナダ、レスブリッジ大学の学長から「アルバータ州：大西部史」全6巻の寄贈を受けた。多謝。

レスブリッジ大学はカナダ西部にある大学で、本大学との姉妹校。

Alberta in the 20th Century. 6vols. (compliment は寄贈図書)



「3」の不思議(1)

DNAの中にある「神の国」

気がめいている時に、ふと前が明るくなることがある。

最新刊「ニュートン別冊・神の設計図」を手にしたときめずらしくそのような気分になった。

これが図書館の良さであろう。一つの情報、画一的な情報の世界から多様な情報の海に出る。

DNAのマイクロな世界の物語は最もミステリアスな世界であると共に最も知的好奇心をそそるテーマであるからだ。

すでに半世紀前、ケンブリッジ大学の若い学徒がDNAの二重らせん構造を解明したとき、まさしく「神の国」の扉が開かれたのだった。

その彼等はまだ生きて、今進行中の新しい発見のドラマを見守っている。

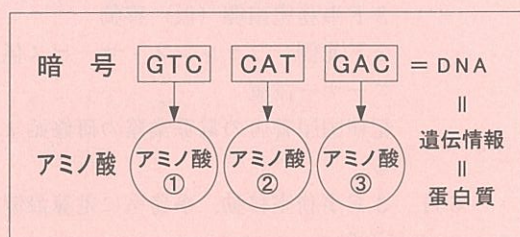
ノーベル賞受賞者の大半は、DNAのミステリーの解決に寄与した人々に与えられて来た。

ワトソンとクリックが二重らせんを解明した時、4つの基本文字、A、T、G、Cの配列が何を意味するかが解けなかった。

しかし、程なくして、それは判明する。A、T、G、Cは3つ組になって1つのアミノ酸を現わす

のではないか。アミノ酸はこの宇宙に20種類存在する。つまり20種類のアミノ酸こそは、命の源に当るものだ。つまり蛋白質を形成する。

つまりこうである。



かくて、4文字の配列はアミノ酸を指示するための「暗号」なのであった。

これに気づいた時、生命のミステリーは一気に解明の度を早めたのだった。

これに気づいた人こそ、ガモフその人である。しかし、このロシア生れの科学啓蒙家は、ノーベル賞を受賞することはなかった。

今、DNAの小史をひもとく時、ガモフの名を忘れるべきではないだろう。

アミノ酸暗号表

1	2				3
	T	C	A	G	
T	TTT)フェニルアラニン① TTC) TTA) ロイシン② TTG)	TCT) TCG) セリン⑤ TCA) TCG)	TAT) チロシン⑨ TAC) TAA) 終止コドン TAG)	TGT) シスチン⑬ TGC) TGA) 終止トリプトファン TGG)	T C A G
C	CTT) CTC) ロイシン② CTA) CTG)	CCT) CCC) プロリン⑥ CCA) CCG)	CAT) ヒスチジン⑩ CAC) CAA) グルタミン⑪ CAG)	CGT) アルギニン⑭ CGC) CGA) CGG)	T C A G
A	ATT) イソロイシン③ ATC) ATA) ATG) メチオニン開始コドン	ACT) スレオニン⑦ ACC) ACA) ACG)	AAT) アスパラギン⑫ AAC) AAA) リシン⑬ AAG)	AGT) セリン⑮ AGC) AGA) アルギニン⑭ AGG)	T C A G
G	GTT) GTC) バリン④ GTA) GTG)	GCT) GCC) アラニン⑧ GCA) GCG)	GAT) アスパラギン酸⑯ GAC) GAA) グルタミン酸⑰ GAG)	GGT) GGC) グリシン⑰ GGA) GGG)	T C A G

「3」の不思議(2)

『バビロニアの数学』 の中のピュタゴラスの定理

予備校の講師だった人が、ある日、東大の教授になった。

古代バビロニアの数学の研究が認められて、その教授は、最近、一冊の本を書いた。

『バビロニアの数学』（東大出版会）。

著者は室井和男氏。

この本から、古代バビロニアの人たちは高い数学の素養を持っていたことがわかる。

彼らは「ピュタゴラスの定理」を用いて方程式を解いていた。

つまりこんなふうである。(P. 148)

- ① 対角線と長さを加えると9。
- ② 3が幅である。
- ③ [長さ] と対角線 (の長さ) はいくらか、君は (答を) 知らないのだから (次のようにせよ) と言い、その解法のプロセスを述べている。

彼らが解いた方法とは、

- ④ ①を2乗する。81
- ⑤ ④から②の2乗を引く。81-9=72。

一方、 $y^2 = X^2 + 3^2$ から

$$\text{⑥ } 81 = 2(X^2 + XY) + 9$$

を得る。

⑦ この方程式を解くと、

$$2(X^2 + XY) = 81 - 9 = 72$$

$$X^2 + XY = 72 \div 2$$

$$X(X + Y) = 36$$

⑧ $X + Y = \text{①}$ つまり、9から

$$\text{⑨ } X = 36 \div 9 = 4$$

⑩ $X + Y = 9$ から $Y = 9 - 4$

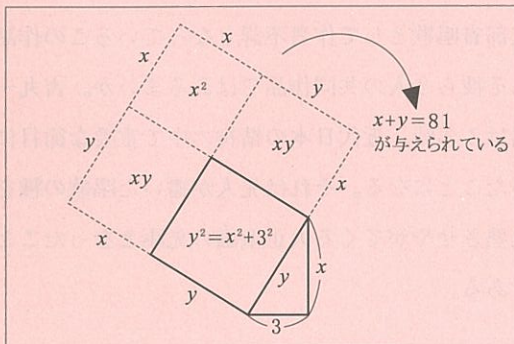
$$= 5$$

⑪ かくて $X = 4$

$$Y = 5$$

という訳なのだが、しかし、我々はこの本の中にもう一つの事実を知る。それは、楔形文字の数学文書を解読した若い学者が第2次大戦で戦死したことである。その人の名はハインツ・ヴァショウ。

戦争は前途ある頭脳を奪い去る。ブラックホールを定式化したシュバルツバルトがそうだったように。



バビロニアの数学

室井 和男著

東京大学出版会 1999年

ISBN : 4 - 13 - 061302 - 2

早春賦で解く 唱歌ミステリー

唱歌の成熟。童謡の先駆

明1	明6	明9	明12	明25	明36	明41	明43
1867	1873	1876	1879	1892	1903	1908	1910
漱石生る	吉丸一昌生る	高野辰之生る	滝廉太郎生る	弘田龍太郎生る	滝廉太郎没(24)	東京音楽学校教授	吉丸(35) 高野(34) 同教授

明治44年(1911)年。春。
この時、吉丸一昌、38歳。
東京音楽学校教授就任から3年目。
彼にとって、人生の充実期に入って行く。
しかし、この時、残されていた時間はあと5年であることを知るよしもない。
酒が好きだった。
学生達のめんどう見もよかった。
特にその中でも、
弘田龍太郎は別格である。
この時、龍太郎19歳。
東京音楽学校の2年生だった。
坂本龍馬と同じ高知県。
やはり、彼の名にも「龍」の一文字がある。同郷の人に、寺田寅彦。
彼は、吉丸一昌にとっても先輩に当る。
吉丸一昌の故郷は、
大分県、臼杵(うすき)
対岸に宇和島を望む城下町。
その地を治めたのは、
戦国武将、稲葉一鉄の末えいだった。
貧しい下級武士の子として、志を立て、熊本第五高等学校へ。
そこで、漱石を知る、

あたかも「三四郎」のごとく、東大へ。
そこには芳賀矢一教授がいた。彼こそは、漱石と同じ船で渡欧した国文学者だった。

上野の下の居酒屋で二人は飲んでいた。
「僕はね、君にぜひ廉太郎を越えてほしいと思っ
てね」

吉丸一昌は1枚の紙を取り出した。
見ると「鯉のぼり」とある。

「いらかの波と雲の中、
重さなる波の中空を
高く泳ぐや鯉のぼり

「百瀬の滝を登りなば
たちまち龍となりぬべき

「では、滝とあるのは、あの滝廉太郎先生のこと
なんですね」

「そうさ、龍は弘田龍太郎ってわけさ」
文部省唱歌として作者不詳となっているこの作品こそ彼ら2人の共同作品ではあるまいか。吉丸一昌はこの時、近代日本の精神の中で重要な節目にいたことになる。それは先人が播いた唱歌の種を成熟させやがてくる大正童謡の先駆となったことである。

明44 1911	明45 1912	大2 1913	大3 1914	大5 1916
「唱歌」／ 1年～2年用発行	「茶摘」「冬の夜」 「同」／3年～4年用発行	「海」「鯉のぼり」 「同」／5年用発行 （『新作唱歌』） 「故郷を離るる歌」 吉丸、「早春賦」	「麗月夜」載る 高野辰之「故郷」 「同」6年生発行	吉丸没（43） 漱石没（49）

[注]「唱歌」は尋常小学唱歌。

唱歌ライバル 物語

叙景の高野 抒情の吉丸

そう思われる理由は、

「早春賦」の中にありはしまいか、
この歌こそ、日本の三大名歌の一つだ。

「荒城の月」「千曲川旅情の歌」。

「早春賦」は、戦後の荒野の中で、人々を故舞した歌だった。まさに「国破れて唱歌あり」の感があった。

当時は、小学校6年生用の教科書に載っていた。
おそらく、その意味、その歌詞はわからなくても、どこか勇んで春を待つ気概を感じさせただろう。

へ春は名のみ

風の寒さや

谷の鶯 歌は思えど …

このあまりにも有名な歌の、作者を、しかし人々は知らない。

よしまるかづまさ
吉丸一昌であることを。

知られているのは、彼のライバルだった高野辰之。

「紅葉」、「故郷」と言えば文部省唱歌の傑作だ。

二つに曲をつけたのは、

岡野禎一。高野と相性が合った。

やはり東京音楽学校教授。

あの早熟の天才、滝廉太郎のライバルだった。

「早春賦」は実は、「文部省唱歌」ではなかった。彼が自由な創作と学生たちへの指導のための教材として発表した「新作唱歌集」の中に収められていた。大正2年のことである。

しかし、吉丸一昌は、それ以外に、多くの「文部省唱歌」を作詞した。

「かたつむり」「日の丸の旗」。

そして、「鯉のぼり」も彼の作であったろう。

高野辰之が叙景的な唱歌作家とすれば、

吉丸一昌は抒情的唱歌作家だったと言える。高野

が静的な自然流だとすれば吉丸は動的な自然流であるように見える。そして、文部省唱歌のなぞは、

さらに拡がって行く。今も作者不詳とされる名歌、

も又、彼の作ではないのか？

「海」（へ松原遠く 消ゆるところ…）

「冬景色」（へ霧消ゆる 湊江の…）

「冬の夜」（へともしび近かし、布ぬう母に…）

「早春賦」の時代に、重ね合わせられるこれらの名歌こそ、吉丸一昌の筆力によるものに違いない。

「三国人」、「神の国」そして乙武氏。

ようやく、ベストセラーの

乙武洋匡氏の

「五体不満足」が図書館にも入った。

その乙武氏は最近では評論家として売り出している。

先日、テレビを視ていたら、

「神の国、えっ、あれ死語じゃないの」

などと言っていたように思う。

たしかに、問題視するほどの意味はない。たとえ、

その中に多くの問題を含んでいるとしても。

かつて、占領期、マッカーサーは

「日本は15歳の少年だ」

と言ったとか。

しかし、今は、その時よりも、

民主主義は成熟した。

「三国人」「神の国」と

インターネットの時代は

もう結びつかなくなっている。

それを笑いとばすばかりか、その言葉を発する人々自身が過去の存在でしかないことを知るのである。

有珠山噴火。

明治43年のそれと酷似とか。

その頃、

わが吉丸一昌氏は、東京音楽学校の教授として、弘田龍太郎たち次世代の音楽家を育てていた。

漱石は43歳。

すでに作家生活4年目。

二葉亭四迷は明治42年に没していた。

噴火はまだ収まっていない。

避難住民の方々に、

せめて「早春賦」を贈り

励ましとしたい。

図書館の動静

★平成11年8月31日退職

室谷佳能子（カウンター・サービス係）

★平成11年9月1日 採用

飯沼周子（カウンター・サービス係）

★平成12年3月31日退職

浦上 忍 事務部長（定年）

中条実穂（情報管理・経常費班）

笠間有紀（レファレンス・サービス係）

★平成12年4月1日 学内異動

五十嵐理夫 事務部長

★平成12年4月1日 採用

柿澤紀恵（遡及係）

山下万里（情報管理・経常費班）

北海学園大学附属図書館報 図書館だより Vol.22 No.1（通巻153号）

本館 〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号 工学部図書室 〒064-0926 札幌市中央区南26条西11丁目
☎(011)841-1161 本館内線 270-275・279 工学部内線 813・814 印刷所：翰アイワード